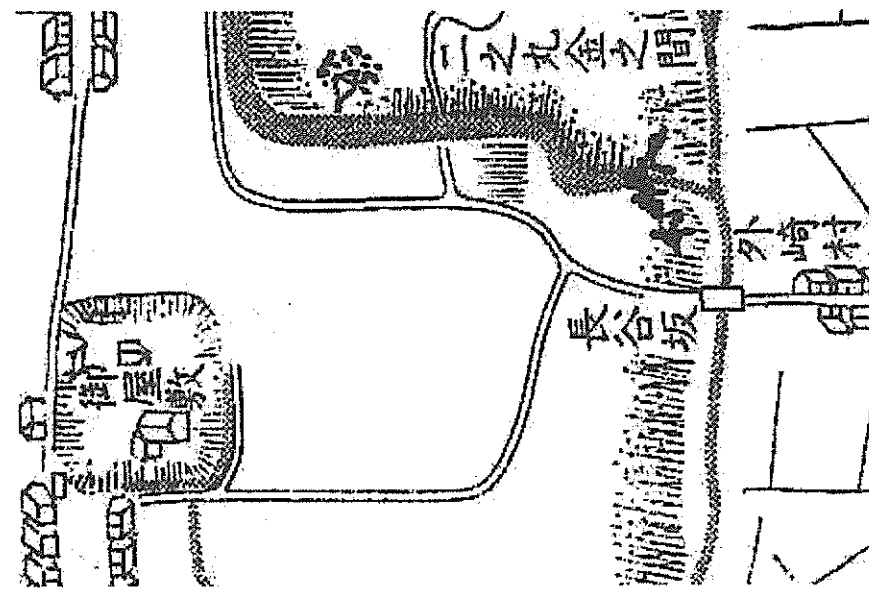


有岡城跡・伊丹郷町遺跡第 309 次調査

現地説明会資料



第 1 図「寛文 9 年伊丹郷町絵図」(『伊丹古絵図集成』より) 部分

2006.11.12

伊丹市教育委員会

有岡城跡・伊丹郷町遺跡 309 次調査現地説明会資料

1. 遺跡名 有岡城跡・伊丹郷町遺跡
2. 所在地 伊丹市伊丹3丁目576-1
3. 調査期間 平成18年10月2日～
4. 調査面積 856㎡(現在調査地約570㎡)
5. 調査主体 伊丹市教育委員会
6. 遺跡の概要 本遺跡は、古くは縄文時代、古墳時代の遺構が検出されますが、主たる時代は鎌倉時代～江戸時代です。また、この間は伊丹氏及び荒木村重が居城していた鎌倉時代～安土桃山時代を「伊丹城・有岡城期」、有岡城廃城後、酒造業で栄えた江戸時代を「伊丹郷町期」に分けられます。この2時期の概要について説明します。

伊丹城・有岡城期

伊丹城は、鎌倉時代末期には在地武士の伊丹氏の居城として存在したと考えられています。「細川両家記」によると天文2年(1533)に一揆衆に攻められた際には「堀」があったことが記されており、このころには戦国城郭として整備されつつあったことが伺えます。永禄11年(1568)に織田信長が入京すると、伊丹氏は信長方につき、「摂津の三守護」の一任に付きませんが、荒木村重によって、天正2年(1574)に落城させられます。

荒木村重は、伊丹城を「有岡城」と改め、侍町と町屋を堀と土塁で取り囲んだ「惣構え」の城に大改造したと考えられています。

中世の城は、城と家臣団の居住地や町は離れた各所にありました。それが次第に近接されるようになり、室町時代末期には城と町を堀や土塁などの防御施設によって囲む「惣構え」の城が造られ始めます。有岡城は「惣構え」の城としては早い段階で成立した城にあたり、歴史的に重要視されています。

有岡城の構造は、「信長公記」の記述や江戸時代の絵図などから、主郭は現在のJR伊丹駅付近とされ、その西側に侍町、また、その西側一帯に城下町が広がっていたことがわかっています。

主郭部の発掘調査では、主郭部の周囲に内堀と土塁が設けられていることがわかり、内堀の規模は幅約15m、深さ約2.5m以上で、堀には石

垣はなく、素掘りであることも確認されました。

さらに、主郭部の西側にあった侍町の発掘調査では、堀跡を数ヵ所検出し、侍町にも幾重の堀を巡らしていたことがわかりました。また、江戸時代に描かれた『文禄伊丹之図』(第4図)では、伊丹郷町の中央部を南北に流れる大溝筋が描かれ、それに平行するように土塁が表現されていることから、侍町と城下町を区画する防御施設が設けられていたと考えられていました。平成11年の県道伊丹停車場線の発掘調査や平成15年の第276次調査で、大溝筋と考えられる遺構を検出し、その実態が明らかになりました。大溝筋は当初は幅約6m、深さ2.7mの堀で、形状は逆台形を呈する箱堀であることもわかりました。その後、江戸前期には埋め戻され、その上層に新たに石垣溝を設けて、近代まで使用されていました。

また、検出した堀跡は現在の地割に平行するものが多く、伊丹郷町内の地割りは有岡城期から改変されていないこともわかりました。

近年、市街地再開発事業に伴い、城下町部に位置する宮ノ前地区を中心に発掘調査がおこなわれ、大溝筋の西側を平行するように南北に延びる堀跡が検出されて(第3図)、主郭部西側の侍町、城下町など広範囲に防御施設を設けていたことが明らかになりました。

伊丹郷町期

有岡城は天正7年(1579)に信長に攻められ、落城します。その後、天正11年(1583)に廃城となり、残された城下町は江戸時代以降、酒造業を中心とした在郷町として発展します。

伊丹郷町を構成する15ヵ村のうち伊丹村は、当初は材木町、鍋屋町など15の町で形成されていました。町場は次第に拡張し、江戸中期には27町に増えます。

発掘調査では、町屋の変遷も確認しており、江戸初期(17世紀初頭)では伊丹郷町の中央を南北に通る有馬道や東西の昆陽口道など主要な大道に面した場所に2×2間程度の掘立柱建物跡を検出していますが、江戸中期(17世紀末～18世紀初頭)には建物が一気に大型化し3×5間規模のものとなり、礎石建物が増え始めます。江戸後期(18世紀後半～19世紀前半)には二階建て建物が建てられるようになり、また、人口の増加のためでしょうか、一気に裏地開発が進み、裏地にも建物が建てられるようになります。このような発展の大きな要因は、伊丹郷町の主産業であった酒造業の盛期と大きな関係があると考えられており、その盛期は元禄年間から享保年間(17世紀後半～18世紀初頭)、文化・文政年間(19

世紀前半)で、町屋の変化期と一致します。

町屋以外にも、酒蔵遺構が郷町内で多く検出されます。江戸前期は現在の産業通り周辺に点在し、4×5間以上の礎石建物、釜場や搾り場などの酒造遺構も単基式のものが検出されます。江戸中期には産業通りの西側・南側にある町屋地域に広がり、礎石建物も6×6間以上と大型化し、それに伴い礎石下には数段の根石を設けるようになります。釜場や搾り場も単式に加えて2基連式のものが出現し、酒造業の発展が遺構からも伺えます。江戸後期はさらなる発展がみられます。有岡城落城後、畑地となっていた大溝筋より東側地域にも酒蔵が建てられ、伊丹郷町内に広く点在するようになります。建物はさらに大型化し、6×10間以上となり、搾り場なども4基一体のものなどが出現し、酒造業がさらなる発展期を迎えたことが発掘調査でも確認されています。

7. 調査成果

第309次調査区は、主郭部の東南約150mに位置します。『文禄伊丹之図』(第4図)や『天保15年伊丹郷町分間絵図』(第5図)をみると、有岡城の東南に位置する下市場村に通じる長谷堂坂に続く道とその長谷堂坂と交叉して南北に延びる道の角地に位置すると考えられます。江戸時代には伊丹村のうち「堺町」、明治時代からは伊丹町のうち「鳩ノ垣内」に属していました。

この地点は明治19年(1886)の「酒造場絵図面届書写」(伊丹酒造組合文書)(第6図)によると小山与兵衛の蔵があったところです。与兵衛は明治5年に初めて史料に見える酒造家で、その後、この土地は明治42年までに小西家が所有し、小西酒造株式会社の東蔵(戦後は寿蔵)となりました。明治42年には清酒1217石、大正8年(1919)には1258石、昭和2年(1927)には1579石、同10年には1639石を醸造しています(以上、『伊丹市史』第3巻)。

発掘調査は、現在継続中ですが、いくつかの成果がみられ、主なものについて説明します。

伊丹城・有岡城期

有岡城期の資料としては堀跡を検出しています。

SF01(堀跡) 堀跡(第8図)は、調査区北側を東西方向に延びるように検出しました。規模は、長さ約18m以上、幅約5m、深さ約1.5mを測ります。形状は逆台形状を呈します。

出土遺物は、備前焼甕、中国製青花皿、唐津焼皿、志野焼鉢などが出

土し、これらの出土状況から、有岡城落城後の16世紀末～17世紀初頭には埋め戻されていることがわかりました。

この堀は『文禄伊丹之図』(第4図)・『天保15年伊丹郷町分間絵図』(第5図)などの絵図にみられた長谷堂坂に続くと考えられる調査区北側の道路に平行しており、有岡城期からの地割りが続いていることがわかりました。また、主郭部南側地域で検出された堀としては、本調査区の西側に隣接する第112次調査地点(伊丹3丁目544)で東西に延びる堀跡を検出しています(第3図)。ただ、本調査区堀跡(SF01)とは検出位置が異なり南側の道路(本調査区南側道路と同じ)に面しており、検出状況からこれとは別の堀跡と考えられます。

このことから、今回、新たに東西に延びる堀跡(SF01)を検出したことは、この地域が有岡城において重要な地域であったことを想定させる発見となりました。

伊丹郷町期

伊丹郷町期の資料は、町屋遺構、酒蔵遺構を検出しています(第7図)。第1次面では、南壁より約6m付近で土間を検出しました。また、これより北側ではゴミ処理土坑と考えられる土坑群や便桶が数基検出したことから、南側の道路に面して町屋が存在し、その北側は裏庭空間であったと考えられます。この町屋の年代ですが、土間下の整地層から出土した遺物から18世紀後半～19世紀前半には町屋が建てられたと思われます。

調査区中程から北側では礎石建物を検出しました。礎石は、数段の根石を積んでおり、大型建物に対応するためと考えられます。礎石は隣接もしくは切り合うように検出され、その状況から2回造り替えられていることがわかりました。規模は、建物1は南北8間(約16m)以上、東西7間半(約15m)以上、建物2は南北8間(約16m)以上、東西6間(12m)以上でした。

礎石の掘形から出土した遺物の年代観から、建物1は18世紀末～19世紀前半、建物2は19世紀前半～中頃と考えられ、短期間に造り替えられていることがわかりました。また、礎石には「大坂屋口左衛門」や「う」・「か口」などの墨書をもつものもみられました。

さらに、この建物内からは、酒搾りを行う施設である搾り場遺構(男柱と搾った酒を受ける垂壺が組み合せ)を2基検出し、この大型の礎石建物が酒蔵であったことがわかりました。検出された2基の搾り場遺構は、2槽さし単基型のもので、これらの埋土から出土した遺物の年代観から、搾り場2は建物1、絞り場2は建物2に伴うと考えられます。

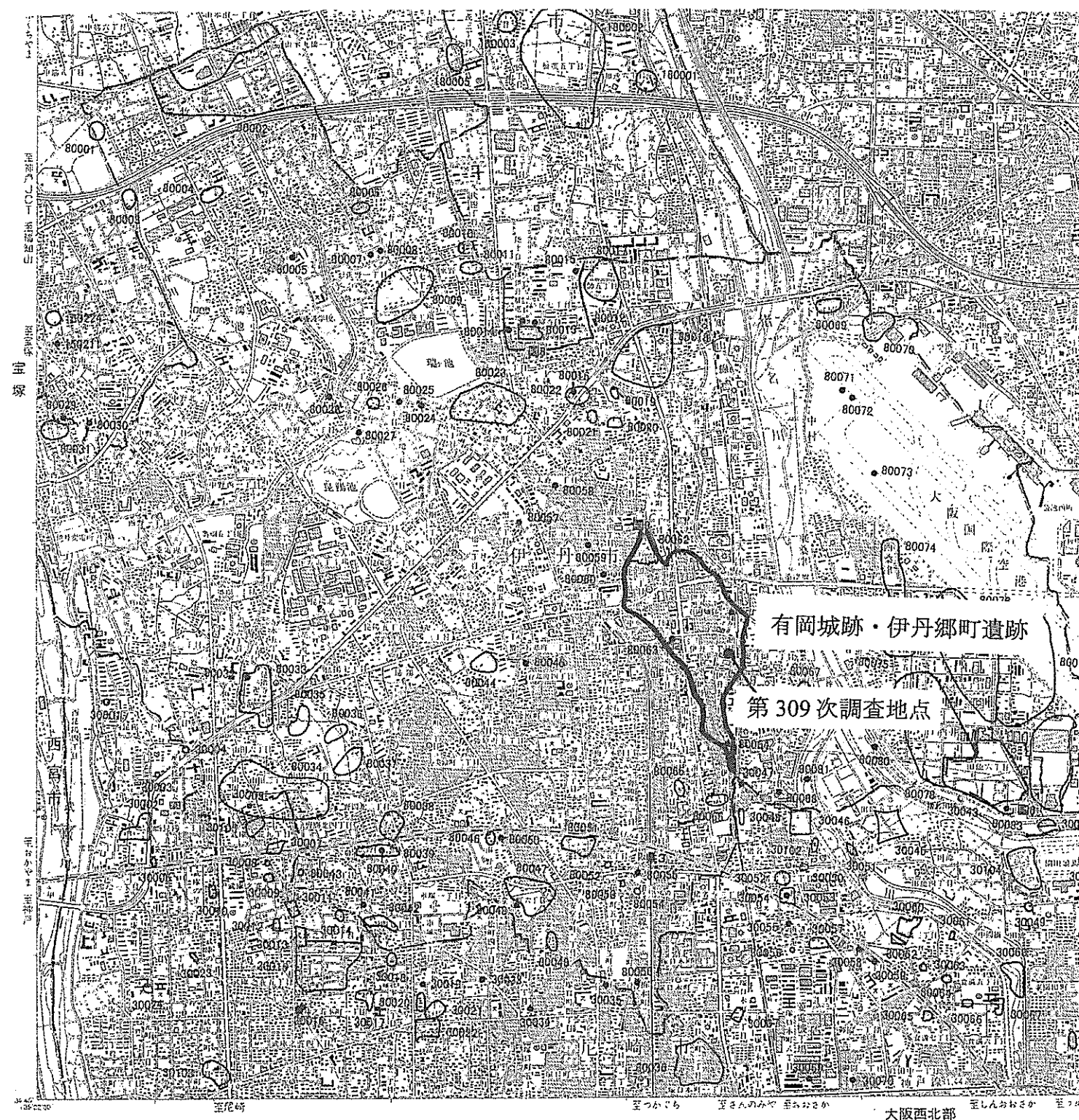
先にも述べましたが、本調査区は「明治19年酒造場絵図面届書写」(第

6 図)では、小山与兵衛所有の酒蔵であったことがわかっており、間取りをみると建物 1・2 の地点は澄まし蔵に相当し、今回の発掘調査による検出状況と一致します。本調査区は調査直前までは全域が酒蔵でしたが、18 世紀末～19 世紀初頭は南側に町屋が存在したことが新たにわかり、さらに、明治 19 年以前の 18 世紀末～19 世紀初頭には北側を中心に建てられていたことがわかりました。

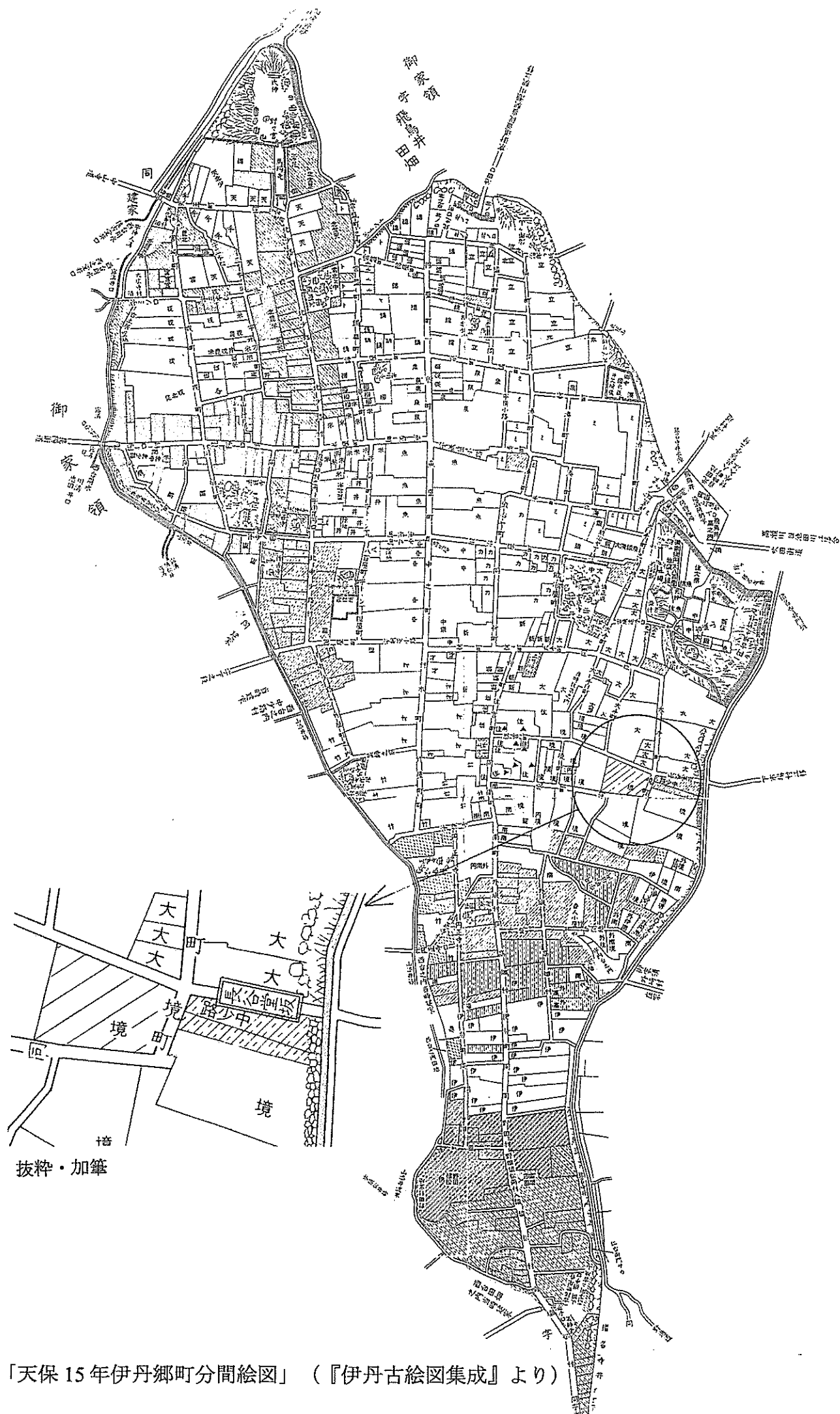
8. おわりに

今回の発掘調査では、江戸時代後期の酒蔵の遺構を発見しましたが、そのうちの礎石の 1 つに墨で「大坂屋口左衛門」(口は読めず)と書かれているものが見つかりました。伊丹で出土品に名前が記された例として、旧岡田家酒蔵で見つかった「鹿し清」と墨書された礎石があります。「鹿し清」は岡田家酒蔵で銘酒「松緑」を醸造していた「鹿島屋清右衛門」のことです。また、有岡城跡主郭部西側の第 24 次調査で「丹波屋おつき」と墨書された平瓦が出土しました。これは 19 世紀半ばに短期間酒造株を持っていた「丹波屋つぎ」の名です。今回発見の「大坂屋口左衛門」も酒蔵の所有者である可能性が大きいのですが、残念なことに古文書などでは該当する酒造家は見つかっていません。今後の研究課題です。

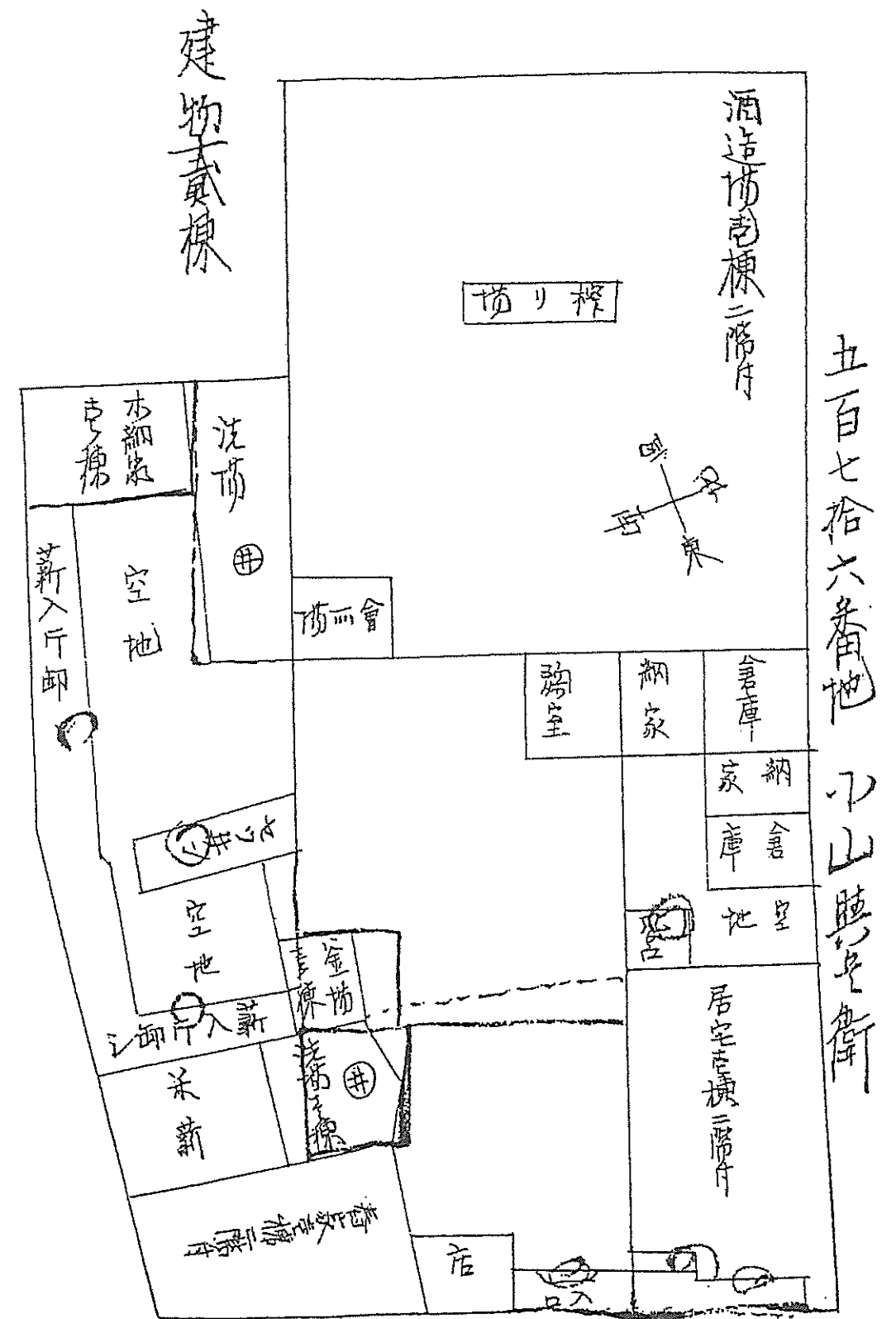
調査は今も継続中で、本調査区の詳細はまだわかりませんが、今回検出した堀跡は、有岡城期の構造を知る上で好資料を提供したと思われる。



第 2 図 位置図 (「兵庫県遺跡地図」より抜粋・加筆)



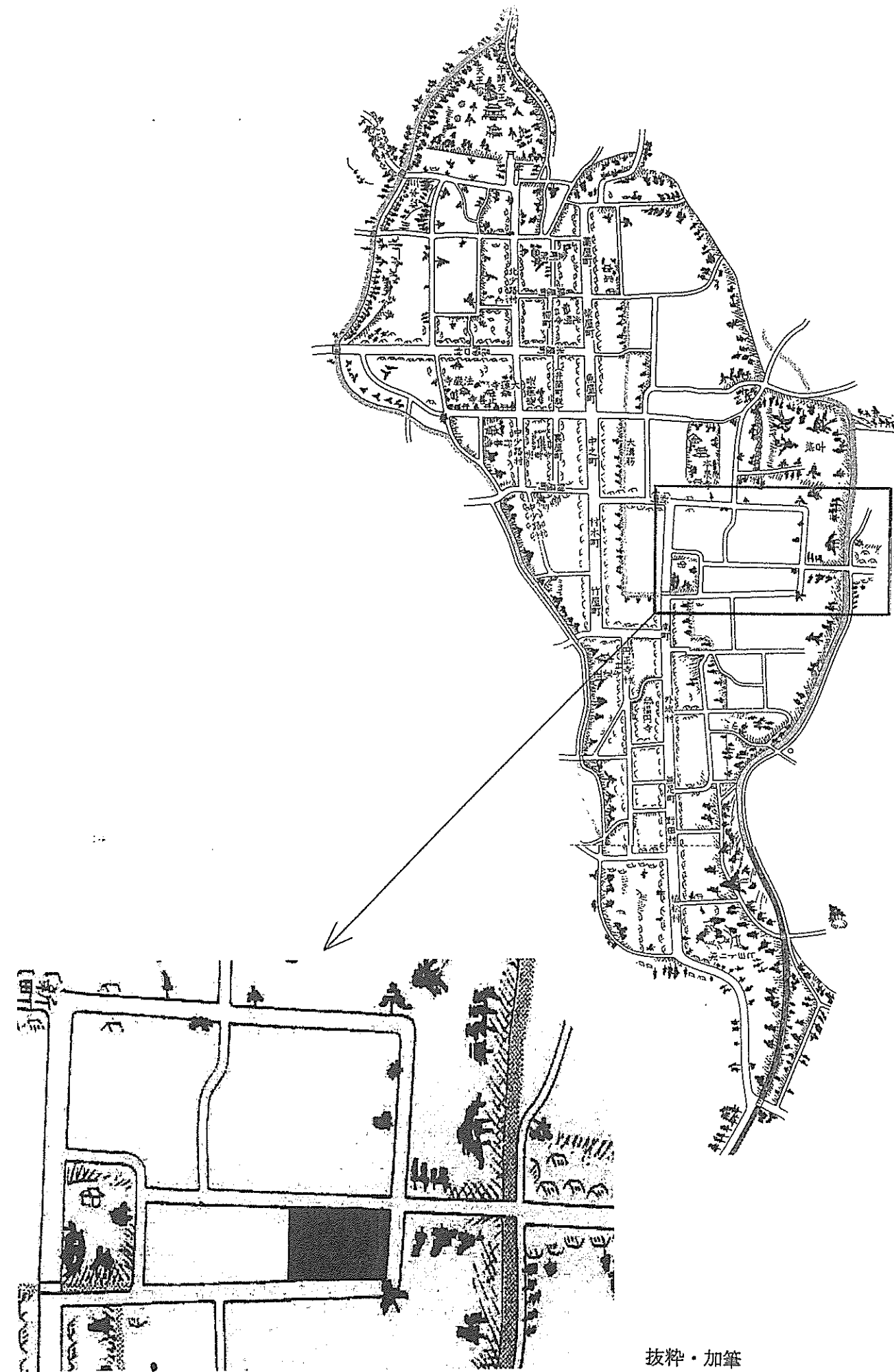
第5図「天保15年伊丹郷町分間絵図」（『伊丹古絵図集成』より）



第6図「明治19年酒造場絵図面届書写」（『伊丹酒造組合文書』より）

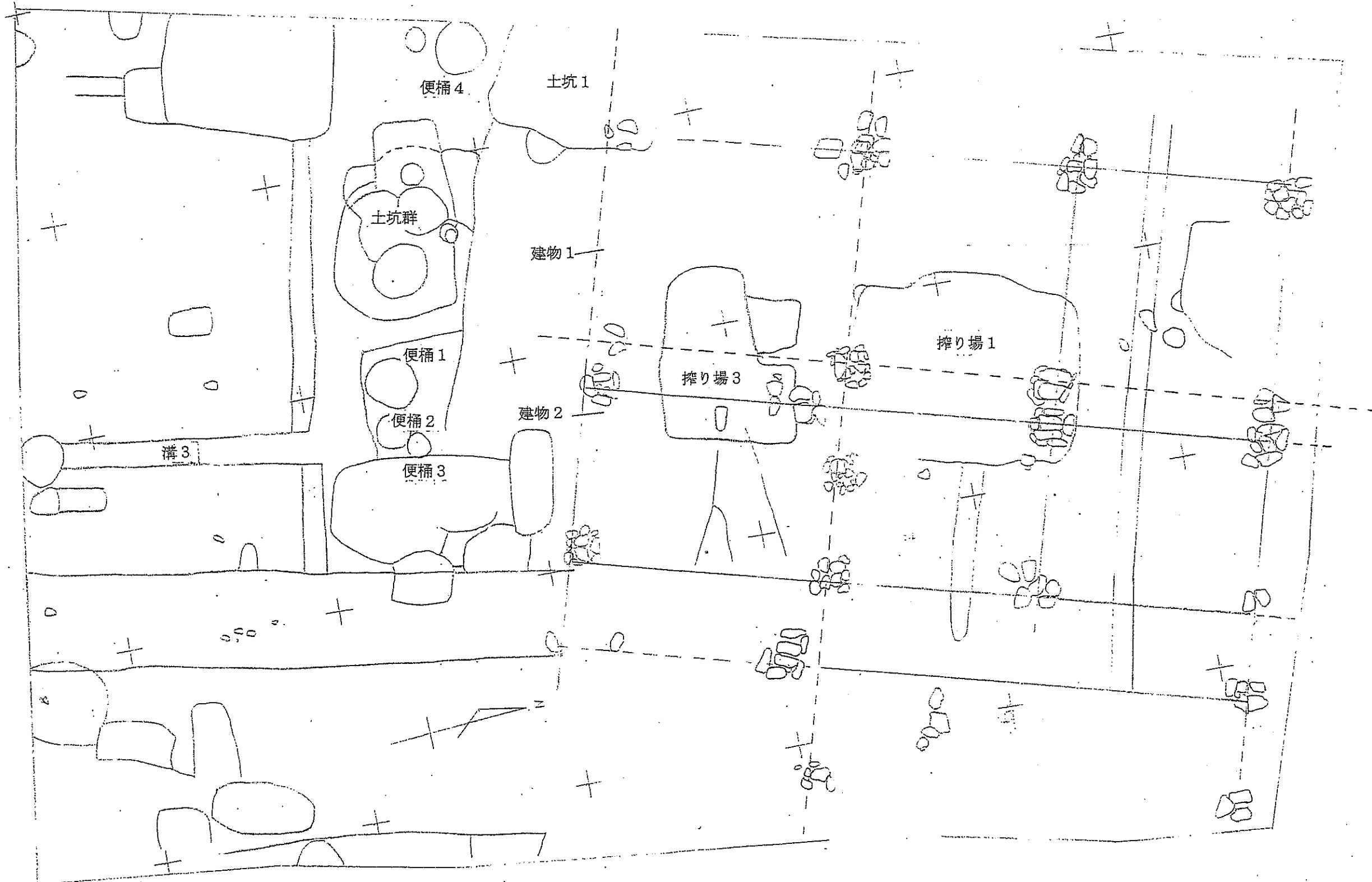


第3図 有岡城惣構え復元図



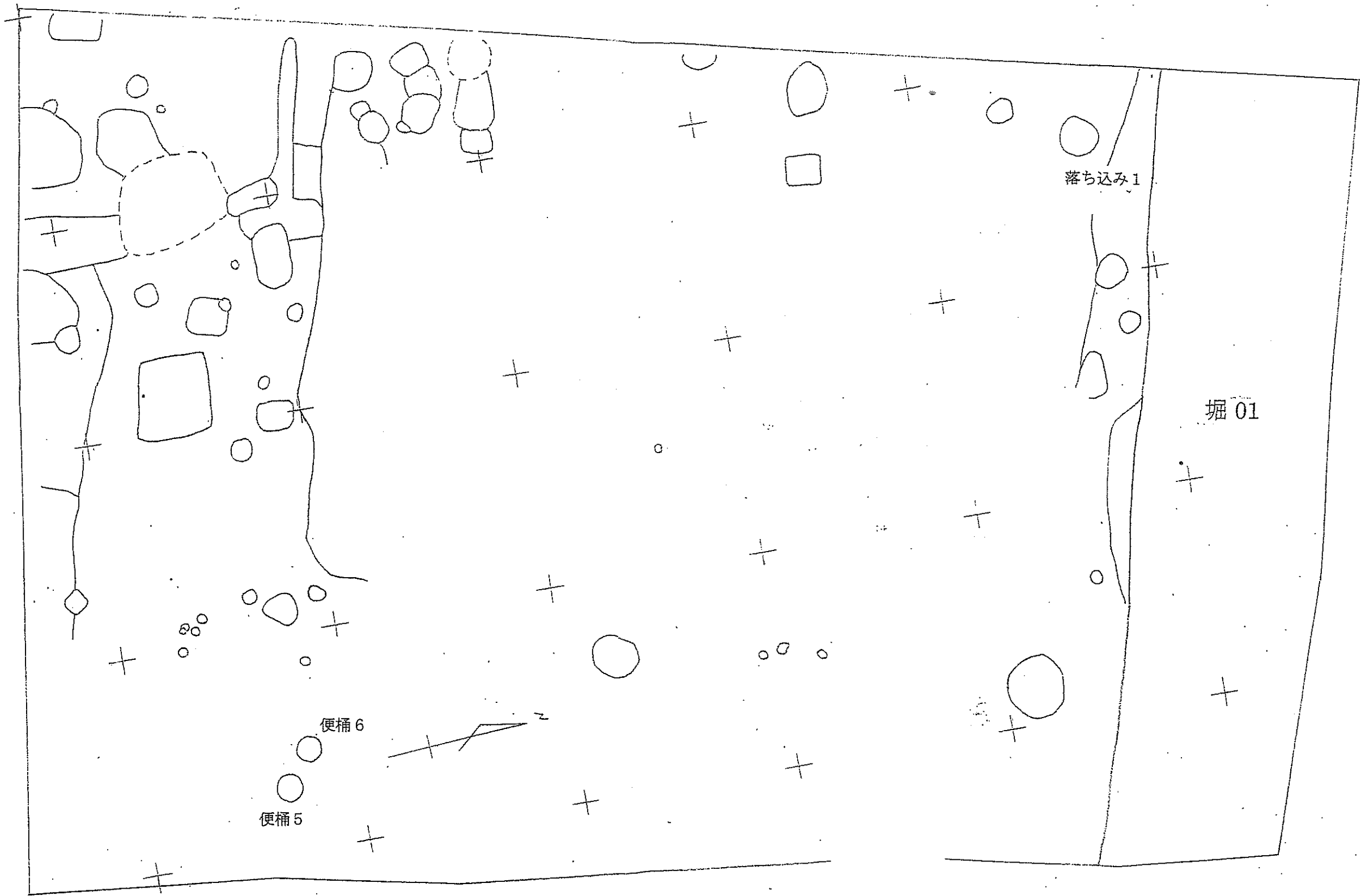
抜粋・加筆

第4図「文禄伊丹之図」(『伊丹古絵図集成』より)



--- 建物1
 — 建物2

第7図 第309次調査区第1次面 S=1/100



第8図 第309次調査区第2次面 S=1/100